

飛 騰

平成 7 年 2 月
第 12 号



海 援 隊 旗

本年度の回顧

副館長 池 上 毅

入館者激減の年であった。異例の猛暑、他県の渇水さわぎのあおり、不景気等々要因はいろいろ言われた。当館の例年入館者ベースが概ね15万人であるが、6年度は12万台にとどくかどうかというところである。この数字は経営面にも少なからず影響する。

ところで、坂本龍馬記念館を利用される皆さんは、当館をどのように見ていただけるのだろうか。つまり当館の評価である。異常気象も不景気も長いサイクルでみれば一過性のもので、これによって来館者が減少したということは、とりたてて気にとめることではない。問題は運営の中身をどのようにみられるかということだろう。観光地桂浜に在って、それとリンクしているから大丈夫だ、観光客にさらっと見ていただいたらいいのではという見方もある。事実、

桂浜への入りが多い時は入館者も多い。しかし、桂浜は自然の佳勝地、我が館は曲がりなりにも文化施設である。意図をもって運営されている施設である。

翻って、当館の如き施設は入館者の増減に一喜一憂すべきかということも時として考えてみる。入館増を図るだけなら、それなりの手法もあるかも知れない。かといって、利用されない箱では存立も問われよう。いろいろ素人の凡人には迷いごとばかりであるが、所詮は皆さんに提供する資料の充実ということに尽きるのではないかと、自身に納得させている。開館して3年を経た今、展示資料を含めて運営の見直しを問われている時かも知れない。

当館に勤務させていただき1年に満たない。かつ、学芸的な面には全く不明の身で、専ら人の入り具合といった皮相な面の回顧となってしまう。何はともあれ、坂本龍馬記念館の運営について、皆様のご指導をいただきますようお願いしたい。



▲遊歩道から眺めた坂本龍馬記念館

春の企画展 平成7年3月19日～5月5日

「坂本龍馬と福井藩」展の紹介

学芸専門員 下元正清

坂本龍馬と長崎や薩摩藩、長州藩の関わりは薩長同盟や海援隊の活動等を通して広く知られているが、龍馬と福井藩との関わりについては、あまり知られていないように思われる。

ところがよく調べてみると、龍馬と福井藩の関わりは、前者と比べて優るとも劣らないものがある。ただその関わり方に違いがある。そこで龍馬と福井藩の関わりについて、少し具体的に述べてみたいと思う。

全国約300藩の藩主のうち、龍馬が謁見したのは福井藩主松平慶永（号春嶽）ただ一人である。最初の謁見は、龍馬が脱藩した文久2年(1862)閏8月の下旬、場所は江戸・福井藩上屋敷（常盤橋邸）で、この時龍馬は春嶽から、勝海舟、横井小楠への添え書（紹介状）を頂いている。

この最初の謁見で春嶽は龍馬について好い印象を持ったためか、その後龍馬の思想や行動に理解と関心を持ち、龍馬の脱藩罪赦免を土佐藩主山内豊信（号容堂）に働きかけた。また龍馬暗殺の翌16日には、土佐藩仕置役福岡孝弟を京都の福井藩邸に召して、龍馬暗殺の様相や犯人などについて尋ねている。

春嶽は皇室を尊敬するとともに、徳川氏親藩の筆頭という立場をよくわきまえていた。

春嶽は熊本藩士横井平四郎（号小楠）を、三顧の礼をもって政治顧問に迎え、橋本左内・中根雪江・長谷部恕連・村田氏寿・三岡八郎（由利公正）らの開明派の俊秀を重用して、藩政改革、沿岸警備の強化等に取り組んだ。

この小楠・中根・長谷部・村田・三岡らも、龍馬と深い親交がある。

春嶽は將軍継嗣問題で謹慎が解けた後、幕府の懇請を入れて政事総裁に就いた。この時小楠の建言に基づき、幕政改革の切り札として「国是七条」を提出し、幕閣にその実現を追っている。

この「国是七条」をはじめ、諸提言に一貫して流れる小楠の思想は、龍馬の思想形成の上に大きな影響を与えている。

龍馬は幕府の勝海舟・大久保忠寛（号一翁）・永井尚志らから得た海外情勢の知識、小楠らから受けた実学的・開明的思想、尊攘派志士の過激な言動に対する疑問、それらに加えて龍馬自身の貴重な体験等を総合して、自ら倒幕・開国・公武合体の道を選んだ。

龍馬のこうした認識は「船中八策」となり、これを認めた土佐藩仕置役後藤象二郎は、容堂に進言して土佐藩の「大政奉還建白書」（慶応3年10月3日提出）へと発展した。更に「新官制擬定書」「新政府綱領八策」の作成と、新政府の体制作りに進む。

龍馬にとって頭の痛い問題は、新政府の財政問題であった。慶応3年11月の初め、藩命によって福井を訪れた際、特に福井藩の承認を得て、当時閉居中だった、財政の専門家三岡八郎を龍馬の旅宿煙草屋に招き、夜遅くまで熱心に意見の交換をしている。

その後京都へ帰った龍馬は、三岡を新政府に推薦し、新政府はそれを受けて早速三岡を徴士に任じ、上京を命じた。



▲松平春嶽

松平春嶽と土佐藩主山内容堂は、島津齊彬（薩摩藩主。齊彬没後は久光）、伊達宗城（伊予宇和島藩主）とともに、四賢侯と称せられる程の英邁な方で、年令的にも近く（容堂が1歳上）、境遇や思想の面でも似ている部分が多いところから、「熟友」の間柄であった。

文久3年の龍馬の脱藩罪赦免については、春嶽も一役担っていると伝えられるところから、特に慶応2・3年頃の龍馬の活動については、二人の間でいろいろ話があったかもしれない。

龍馬率いる海援隊には、山本龍二郎（関義臣）、渡辺剛八（大山壯太郎）、三上次郎、小谷耕蔵、腰越次郎、佐々木栄ら越前出身の隊士がいた。この人数は、土佐藩出身の人数に次いで多い。

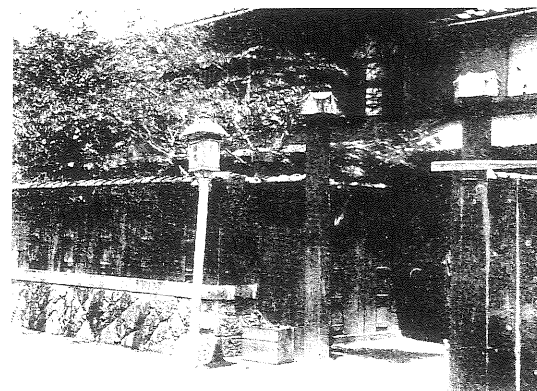
このように見てくると、龍馬と福井藩は深く関わっていることが理解できよう。

この度の企画展では、激動の幕末において、龍馬と福井藩の関わりを具体的に見ていく中で、それが龍馬の人間形成（思想も含めて）や明治維新にどのように影響したかを考えてみたいのである。

以上の趣旨に基づいて、18枚のパネルを自作し、当館1階北ホールに展示する。

その主な内容は、次の通りである。

- 1、京都から福井へ
- 2、坂本龍馬と福井藩（年表）



▲龍馬が泊った福井の旅宿「煙草屋」

- 3、坂本龍馬と松平春嶽・中根雪江
- 4、神戸海軍操練所建設費の援助要請
- 5、坂本龍馬と横井小楠
- 6、坂本龍馬と由利公正（三岡八郎）
- 7、松平春嶽と山内容堂
- 8、越前出身の海援隊士

今回の企画展の構想は、去年の夏頃より温めていたもので、同12月の福井訪問の結果、決定したものである。

今年の11月、取材のため先ず京都南禅寺天授庵の横井小楠の墓に詣うで、次に再び福井を訪問し、村田氏寿の眠る孝顕寺や龍馬の旅宿「煙草屋」跡等を訪れた。村田氏寿の墓の正面は大部分が剥落し、僅かに村田氏寿の小さい字が残っていた。寺の奥様の話では、誰も掃除に来ないそうで、寂しいかぎりであった。

更に東京へ足を延ばして品川・海晏寺を訪れ、寺の御高配によって松平春嶽・中根雪江・由利公正の墓に詣うで、写真を撮ることができた。

この文に載せた2枚の写真は、福井市立郷土歴史博物館より提供された写真の一部である。

今回の企画展では、平素見ることのできないこうした写真を見ることも、楽しみの一つではなからうか。（終）

館だより「飛騰」の継続購読について

「飛騰」は年4回（2・5・8・11月）発行しており、主な内容は企画展の紹介、坂本龍馬及び彼に関係した人物についての小論文、来館者の声等です。

継続購読は現在約60名が登録されています。

継続購読を希望される方は、これの郵送料だけを負担していただきます。1回80円×〇回分を80円切手で、当館宛送って下さい。その時、第〇号から住所氏名を明記して下さい。

坂本龍馬と越前福井藩 (抄)

年	坂本龍馬の行動	社会の動き
文久2 (1862)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 閏8月頃龍馬は岡本健三郎を同道して江戸越前藩邸を訪れ、松平春嶽に謁見して勝海舟、横井小楠への添書を受ける。 ・ 12月、龍馬は間崎滄浪、近藤長次郎と共に春嶽に謁見し、大坂湾防備について意見を述べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月 和宮と家茂の婚儀。 ・ 4月 寺田屋騒動。 ・ 6月 勅使大原重徳東下。 ・ 11月 幕府、攘夷の勅旨に従うことを決定。
同 3 (1863)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 5月、勝の使者として福井へ赴き、神戸海軍操練所建設費援助5千両を借用する。小楠の案内で由利公正に会う。(5千両は千両という説もある。) ・ 同月、京都越前藩邸に中根雪江を訪れ、春嶽の入洛を促す。 ・ 6月、京都越前邸に村田巳三郎を訪れ、神戸海軍操練所建設費援助の答礼として、洋銃一挺を贈る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3月 将軍家茂入京 ・ 4月 神戸海軍操練所設立決定。 ・ 5月 長州藩、下関で米、仏、蘭船を砲撃 ・ 7月 薩英戦争。 ・ 8・18政変 七郷落ち。 ・ 9月 土佐藩 勤王党弾圧。
元治元 (1864)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月 勝の使者として、熊本沼山津に蟄居中の横井小楠を見舞う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 7月 禁門の変。 ・ 8月 幕府、征長令を発す。
慶応元 (1865)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4月、龍馬ら西郷隆盛にしたがい鹿児島に向う。 ・ 5月、薩長和解のため大宰府を訪れる。 ・ 閏5月、長崎に亀山社中を設立。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3月 神戸海軍操練所廃止。 ・ 4月 幕府の第二次征長。 ・ 閏5月 武市半平太切腹。
同 2 (1866)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月、薩長同盟の周旋。寺田屋事件、龍馬負傷。 ・ 2月、小松帯刀、西郷に同行して京都出立、鹿児島に向う。妻お龍を伴う。 ・ 8月、越前藩士下山尚に政権奉還について説得する。 ・ 12月、土佐藩士溝淵広之丞を桂小五郎に紹介する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月 薩長同盟成立。 ・ 8月 将軍家茂死去。征長中止。 ・ 12月 徳川慶喜、将軍就任。 ・ この年、農民一揆、うちこわし各地で激化。
同 3 (1867)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月、広之丞の周旋で、長崎・清風亭で後藤象二郎と会談する。 ・ 4月 脱藩罪赦免、海援隊設立。 ・ 6月 船中八策成る。 ・ 11月1日、春嶽に謁見し、山内容堂の親書を渡す。春嶽上洛についての後藤の要請を伝える。 ・ 同月2日、由利と会い財政問題を話し合う。 ・ 同月15日、龍馬、京都近江屋で暗殺される。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 10月3日 土佐藩、大政奉還建白書提出。 ・ 同月13日 慶喜、大政奉還の決意表明。 ・ 同月14日 討幕の密勅が薩摩と長州に出る。 ・ 同月15日 大政奉還勅許。 ・ 12月9日 王政復古の令。

砂浜美術館に学ぶ

館長 小椋克己

「高知県立歴史民俗資料館」が南国市岡豊にオープンしたのが平成3年5月、その年の11月「県立坂本龍馬記念館」(高知市)と本山町の「大原富枝文学館」、それに野市町の「県立のいち動物公園」というように、この年だけで文化関連施設が4つも誕生した。そのあとも、平成4年8月「佐川地質館」(佐川町)平成5年11月「県立美術館」(高知市)、平成6年1月「浜口雄幸生家記念館」(高知市)、4月「中岡慎太郎館」(北川村)と続き、いま「県立文学館」が誕生にむけて準備を進めている。

それまでにオープンしている「自由民権記念館」「紙の博物館」「トンボ自然館」なども考えるとこの数年間の傾向は目覚ましい。

坂本龍馬記念館は、龍馬生誕150年記念事業として青年たちの募金活動によって完成、県に寄贈されスタートしている。また中岡慎太郎館は「慎太郎を表舞台に出そう」という地元の熱意がいくつかのイベントを成功させ、村当局を動かした。

トンボ自然館と自然公園は、世界一多くの種類が見られるトンボ棲息地を保存し、理解を深めたいと言う青年の思いと努力が、世界的な市民運動と行政をタイアップさせて実現した。

こうした施設誕生の歴史は、そのまま「まちおこし」「地域おこし」につながり、その地域のみならず、広い範囲との文化交流に発展している例が多い。

ところで、幡多郡大方町には「砂浜美術館」というのがある。ここにはパンフレットはある

が、建物はない。

「私たちの町には美術館がありません。美しい砂浜が美術館です。」の書き出しで始まるパンフレットは、美しい円弧を描く大方町入野海岸の砂浜を美術館に見立て、波や風がそこに描き出す「模様」、そこを走る「小鳥の足あと」、沖に見える「くじら」、浜をとりまく「松原」、流れ着く「漂流物」も作品にしてしまう基本的な考え方を示している。

「作品は24時間・365日展示され、時の流れるままに変化します。BGMは波の音、夜の照明は月の光……」

このコンセプトは「Tシャツアート展」「砂の彫刻展」を展開する、冗談の好きなグループ「砂美人連(サミットレン)」や、大まじめに「砂浜美術館学芸員」の名刺を持つ役場の人たちが知恵を出し合い、県内のデザイナーと作りあげたもの。現実では、全国との交流が生まれ、ホエールウォッチング、ラッキョウの加工品造り、漂流物と環境浄化、松林の再生など「実業」に結びついている。ホエールウォッチングは、8月地元で国際会議を開き、世界への情報発信を果たし、漂流物展は、現代美術作家との共同制作展「高知の風の音海の音」となって、今高知県立美術館の中庭を飾っている。

「ものの見方を変えると、いろいろな発想がわいてくる。4キロメートルの砂浜を、頭の中で『美術館』にすることで新しい創造力がわいてくる」「時代を少し動かせるのは、一人ひとりの小さな感性の集まり」というわけで、ユニークで肩を張らない、感性による地域起こしの良い一例だと思う。どのような文化施設であれ、この考え方を忘れてはならない。

龍馬の仕事ぶりにも、感性による創造がたっぷり含まれていたと思う。

開館前の準備期間をふりかえって

学芸専門員 岡林春雄

平成6年11月15日、高知県立坂本龍馬記念館は満3歳になりました。開館以来約45万人のお客様にお越し頂き、皆様の記念館としてすっきりおなじみになった感じがします。

文化財団理事長から平成3年9月6日、記念館開設準備室長と次長が、翌7日には学芸専門員2名が発令され、10月1日5名の解説補助員、11月1日事務担当主監が辞令の交付をうけて、記念館スタートへの陣容が整いました。開館準備室は、南国市岡豊にある高知県立歴史民俗資料館の一室をお借りして店開きしました。

まず、記念館が11月15日にオープンすることをできるだけ多くの方々に知って頂くために、チラシ・パンフレット・ポスター等を関係各機関へ発送、館内配布用パンフレット・入館券のデザイン等ソフトウェアの内容決定、印刷発注、券売機・金銭選別機・コピー機・印刷機・机・椅子・応接セット・公用車・電話機など数え上げてきりがない程多くのハードウェアの選定発注等を文化振興課の皆様のお力添えを得て、静かな中にも大急ぎの多忙な毎日でありました。その間、解説補助員の皆さんは、歴史民俗資料館の方々の中へ入れて頂き、職務に関する研修を積みながら、券売機の扱い方やお客様に対する対応の仕方を身につけていきました。一方では、坂本龍馬及び龍馬を取り巻く人々、浦戸城址を中心とした地域の歴史及びフィールドワーク、龍馬記念館建設の経緯、自由民権記念館・紙の博物館その他類似施設の見学研修にと息詰まるような毎日でした。また、10月10日9時からは、解説補助員の皆さんが着用する制服を決定するために、色々な型や色彩の服を着

用して頂き、時ならぬファッションショウが繰り広げられ、若やいだ華やかな一時もありました。

11月1日、まだ清掃も済んでいない記念館に職員全員が集合し、これからここで勤務する心構えを皆で確認し合いました。大体毎日、9時半頃になりますと、発注してあった各種ハードウェアやソフトウェアの納品が始まり、電話工事・警備関係工事・展示工事の追い込みなど、ほこり舞う館内は一日中ごった返し騒然とした雰囲気の中で、お湯は沸いたが湯飲みの納品がないといった一駒もあって、大変な毎日でした。

このようにして、11月8日展示工事引き渡し・11日報道各社の内覧会・13日寄付を頂いた方への事前公開・14日内覧会、神事、落成式典・記念講演・龍馬フォーラム・祝賀会と続き、ついにオープン当日を迎えました。9時からは関係者によるテープカットを合図に開館され、多くの待ち兼ねたお客様が続々と入館されました。10時からは、開館を祝って南側の八策の広場で南国市の有志による勇壮な龍馬太鼓が披露されました。このようにして呱呱の声をあげてから丸3年、館の内容も着実に整備充実され、龍馬の心意気を目当てに前進しております。これからも、皆様の更なるご支援とご指導をお願いいたします。

入館状況

平成7・1・7現在（開館以来1,149日目）		
○総入館数	458,368人	
○最多入館 平成5・5・3	3,700人	
○最少入館 〃 6・9・29	23人（台風）	
○本年度最多入館 〃 6・5・3	1,989人	
○本年度最少入館 〃 6・9・29	23人（台風）	
○本年度1日平均入館者数	347人	

龍馬と関わる女性について

解説補助員 市川恵子

『龍馬の身長は？』『なんで右手を隠しちゅうが？』『龍馬は何をしたひと？』などの質問に答えていくうちに、少しずつ龍馬や龍馬を取り巻く人物、特に女性について興味を持つ様になりました。

例えば、龍馬の妻と言えば、お龍さん。しかし、その影に龍馬を慕い、生涯独身を通した、千葉佐那さんがいます。晩年、灸治院を開き生活していた頃、小田切兼明の妻豊次に会い、後に豊次は佐那の墓に『坂本龍馬室』と刻みつけたそうです。それから、忘れていけないのが寺田屋の女将お登勢さんです。唯一の楽しみが、人の世話をすることで、棄児も5人まで育て上げたそうです。

大きく時代が変化すれば、何か一つ一つ忘れそうになるけれど、150年以上経った今でも龍馬を慕う人がいる限り、龍馬に関わった人々にも目を向けていこうと思っています。

お客様と接して思ったこと

解説補助員 近沢雅美

おかげさまで、昨年11月15日に開館3周年を迎えることができました。大勢の方々にご来館いただきました。ありがとうございました。

私達解説補助員は、これまで何千、何万人というお客様と接し、直接ご意見やご感想を聞かせていただきました。中には大変厳しいご意見もあり、“なんちゃあない”“おもしろくない”というようなことを聞くのは、とてもつらいことです。もう少しゆっくりと、展示物を見てみてください。触れてみてください。少しでもここへ来てよかったと思っていただきたいです。龍

馬に紛装した若い男性や、1時間も2時間も展示やビデオをご覧になっているし、年配の女性、何回も来館して下さる方々もいらっしゃいますが、そんなお客様に出会うと、ホット安心し、龍馬ファンのみなさんのために、もっと良い記念館にしたいと強く思います。眺望も美しい当坂本龍馬記念館へ是非お越し下さいませ。お待ちしております。



▲当館屋上から見る太平洋。左は桂浜灯台。

広い海

解説補助員 堀川禮子

時折り、お客様が「いい所にお勤めですね」と声をかけて下さいます。

龍馬記念館の屋上から展望する、紺碧の太平洋を目の前にして、本当にその通りだと思えます。日常生活の中で、つまらない事にくよくよしてしまい、つい笑顔を忘れてしまいそうな心にこの広大無辺の海は、小さな心を捨て、広い心と勇気を与えてくれるような気がします。

きっと龍馬もこの海のかなたを眺めながら、その心を養っていた事でしょう。

この太平洋のように、ゆったりと大きく包み込む暖かい心を、いつまでも持ち続けたいと思います。生きる喜び、それは暖かい笑顔ではないかと思えます。笑顔の花を咲かせて、皆様のご来館をお待ちしています。



拜啓 龍馬殿

● 四国に着いて2日目。桂浜に来た。記念館の資料の豊富な事に驚いた。時間に追れているため、納得いくほど居ることができないが、幕末、明治維新の時代は大変ひかれるものがある。

今回は、妻と子供をつれて来ようと思う。

(9月12日 茨城県 S・A 男性)

● 念願の土佐へやってきました。いろいろな本を読んでいるうちに、土佐へ行ってあなたの故郷を一目見たくなったのです。人間一人の力が歴史を変えたといってもよいと思いますが、その礎となったこの地は、思っていたとおりの素晴らしい所でした。

人間は生まれて何をすべきかを、導いてくれたあなたの足跡を、この目で見た今、これからも頑張ろうと思いました。

これからも桂浜から世界を見まもり、平和主義を最後まで貫ぬこうとした精神を人々に伝えて下さい。また会える日を楽しみにしています。

(9月15日 東京都 O・S 男性)

● 龍馬殿、私は北海道函館から貴方におあいしたくて参りました65歳の老人です。子供の頃から貴方をしたい、貴方を手本に生きて来ましたが、いたずらに馬令を重ね申し訳なく思っています。生命あれば、又参ります。

(10月19日 北海道 I・T 男性)

● 20歳の頃「龍馬がゆく」を読んで、あなたの人生を知りました。現在、私は37歳ですが、年をとるごとに思いがかわりました。

20～30歳までは、あなたのスーパーマン的な行動に歓喜をあげるだけでしたが、31歳から現在に至るまで、回りのすばらしい人々のよいと

ころを見事に吸収するあなたの心の広さと寛容さに驚いています。

私もあなたのような心の持主になれるかなあと思ひ、この地に初めてきました。私自身、この4月より新たな道を歩き、学問への道をきわめんがために、あなたのように努力して、あなたに一步でも近づくために精進します。一略一

(11月13日 兵庫県 S・T 男性)

● 日本はまた病んでいます。世界のための日本になるため、もう一度生まれてきて下さい。

(11月15日 北海道 S・H 男性)

● 本日はお誕生日おめでとうございます。合わせまして、ご命日ということで、ご冥福をお祈り申し上げます。(これはFAX)

(11月15日 福岡県 A・K 女性)
(同 上 K・U 女性)

題字「飛騰」について

文久元年(1861)10月11日、龍馬は剣術修行のため、1か月の国暇を得て、讃岐丸亀の矢野市之丞の道場へ旅立った。この日、樋口真吉は、日記に「坂龍飛騰」と記した。

龍馬は更に国暇延長の許可をもらい、極秘裡に長州へ赴いた。彼は武市半平太の久坂玄瑞宛親書を携えていたのである。

長州萩に着いた龍馬は、久坂玄瑞を訪れて半平太の親書を手渡し、国事について会談する。

今まで一介の武芸者に過ぎなかった龍馬が、この旅を機に勤王の志士へと脱皮していくのである。矢野市之丞の所へ行った目的を予め知っていた樋口真吉は、龍馬への期待をこめて「坂龍飛騰」と記したのであろう。翌2年3月、龍馬は脱藩する。(下元書)

館だより “飛騰” 第12号

平成7年(1995)2月1日発行

発行所 高知県立坂本龍馬記念館

〒781-02 高知市浦戸城山830

Tel (0888) 41-0001